

〈対談〉

キャリアと家族

マーガレット・ドラブル／津島佑子



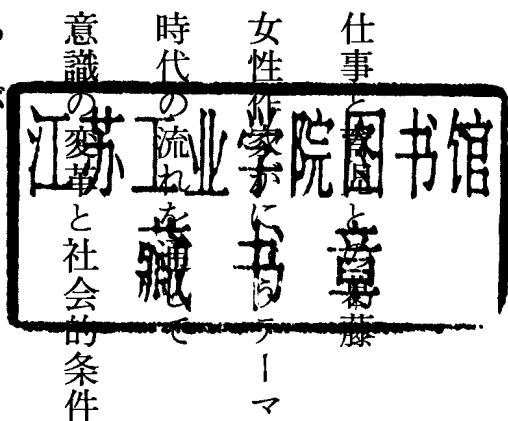
〈対談〉 キャリアと家族

マーガレット・ドラブル

津島佑子

(訳) 高野フミ

あとがき



表紙デザイン＝村田道紀

岩波ブックレット No. 163

仕事と育児との葛藤

司会者 本日は、「キャリアと家族——女性作家とその作品をめぐって」という対談を開催す

ることができまして、たいへんうれしく思います。この議題に興味をお持ちになる方が、このように大勢いらっしゃったことも、私どもにとって大きな喜びでございます。地方からはるご参加くださいました方がたもおいでになります。

本日の対談のために、マーガレット・ドラブルさんと津島佑子さんにおいでいただきましたことは、ほんとうに幸せでございます。とくにドラブルさんには、遠いイギリスから、このためにおいでいただきましたことを、心から感謝申し上げます。

対談の進め方でございますが、さいしょにドラブルさんと津島さんに、おのおの二〇分ほどお話しいただきまして、その後、約四〇分間、お二人の間で意見の交換をしていただきたいと思います。そして、そのあとフロアからのご質問をお受けしたいと考えております。

はじめに、ドラブルさんのお話をうかがわせていただきたいと思います。

ドラブルさんは、ケンブリッジ大学を最優秀の成績でご卒業になりました。さいしょの小説を出版されたのは、二三歳の時でございます。今日までに一一冊の小説を出版されまして、いま、一二冊目をご執筆中でございます。この他に、評論やエッセイもお書きになっていますし、『オックスフォード・コンパニオン・トゥ・イングリッシュ・リテラチュア』の改訂版を編集なさいました。

一九七三年に、E・M・フォースター賞を受賞され、一九八〇年にはCBEの称号を授与されておられます。

作品については、津田塾大学の川本静子教授がお書きになった、立派な評論が下欄にありますので、それをお読みくださいませ。

それでは、ドラブルさんからどうぞ。

ドラブル文学のプロファイル

津田塾大学教授 川本静子

マーガレット・ドラブルの紹介には多くの言葉を必要としないだろう。処女作 *A Summer Bird-Cage* (63) から最新作 *A Natural Curiosity* (89) に至る一一冊の小説は、その大半が翻訳され、日本の読者に親しまれている。一九三九年シェフィールド生まれのこの作家は、二三歳でデビューし、第三作 *The Millstone* (65) でルーウェリン・リース記念賞を、つづく第四作 *Jerusalem the Golden* (67) でジェイムズ・テイト・ブラック賞を受賞した。六〇年代初頭にスタートをきった若手女性作家たちのなかで常に先頭を走ってきたといえよう。その後も、右手で創作、左手で評論といった二本立ての文筆活動を精力的に展開し、今日のイギリス文学界において確固たる地位を築いている。

ドラブルの特徴はジェイン・オースティンやジョージ・エリオットなどによる倫理的風俗小説 (*Novel of Manners*) との親近性である。

ドラブル 私は今回、東京に来ることができ

てとてもうれしいということを、まず第一に申し上げたいのです。招聘してくださった津田塾会の方がた、それから、今日ここにお集まりくださったみなさまにお礼を申し上げたいと思います。

本日、私どもは、女性とキャリアについて、職業としての創作活動について、お話をするわけですが、必然的に私は自分のことをお話することになります。

私はふつうの大学教育を受けました。いまご紹介いただきましたように、ケンブリッジ大学で、英文学を専攻いたしました。そして大学卒業と同時に、卒業したその週に、結婚いたしました。私は主婦としてはまったくだめな人間で、

彼女はこうした先輩作家たちと同じく、ヒロインの「生」を日常的人間関係の場で一貫して追求してきた。特に母性を女の基盤にすえ、産む性として女のアイデンティティを捉えていることがその大きな特徴である。初期の代表作 *The Millstone* は、ヒロインがたった一度の性経験から私生児を産むことになる話だが、このヒロインが母親になる経験を通して外の世界と自分との繋がりを認識していく過程は、多くの女性読者の共感をよんだ。この頃からイギリスでは妊娠・出産・育児など女性の経験を主題とする小説が女性作家によって盛んに書かれるようになるが、女性文学のこの新しい流れにドラブルは重要な一役を買っている。

その後、ドラブル文学は第六作 *The New-
ules Eye* (72) を境に、人物を中心とする小説から、社会全体をとらえる小説へと変わってきている。つまり、数人の男女のかかわり合いの中に、現代イギリス社会の状況をおのずから浮かび上がらせる方向に展開してきたのだ。

英文学の知識は豊富に持っていました。家事をこなす能力はゼロだったのです。しかも、すぐに妊娠してしまいました。主婦としての無能力と、妊娠と、知的活動の欠如から来る挫折感とから、私は小説を書く気になったのです。

さいしょの子どもが生まれる前、私はさいしょの小説を夜なべで書きました。自分の置かれていた境遇が、私を創作に駆り立てたのだと思います。もちろん、子どもが生まれてみえますと私の生活はまた大きく変わりました。時間の余裕というものがなくなってしまったのです。急にひどく忙しくなり、ひどく疲れて、睡眠時間も不足がちでした。それでも私は、家で仕事をする習慣を、それまでに身につけていたのです。実はこの時点で、文学が自分のキャリアになると自覚していたわけではなくて、むしろ「日

こうした変化は、社会的存在としての人間を探索対象とするかぎり、当然予期される展開であり、*The Needle's Eye* 以後のドラブル文学は、E・M・フォスター作『*ハワード・エンド* 邸』(10)の現代版と言えよう。たとえば *The Middle Ground* (80) は主要人物たちの人間関係を現代イギリス社会の断面図とともにすくいとったものであり、今後の人生の手がかりをさぐる中年男女の日常を通して、七〇年代イギリス社会の混沌たる現実が描かれている。この傾向は *The Radiant Way* (86) や *A Natural Curiosity* などにおいてさらに強まり、それにもなって作品世界は大きな広がりを見せ、登場人物たちは多種多様になってきた。と同時に、小説技法の面でも伝統的リアリズムの手法とセルフ・コンシャスな物語作りの融合をはかるなど、物語作りの尖鋭な問題意識がうかがわれる。常に発展しつづける作家として、今後の展開が楽しみである。

曜画家」のようなつもりで、つまり、余った時間を利用して書いていたので、職業というよりも「道楽」のようなものだったのです。けれども、さいしょの小説が出版されることになった時点で、作家として生きることを考え始めました。

さいしょの小説が出版されてまもなく、二人目の子どもを妊娠していることがわかり、自分の人間性と自分のアイデンティティとを両立させるためには、二重生活をしなければならなかったことがわかったのです。この時期、創作は私にとって、アイデンティティを補強してくれるものでした。妻であり、主婦である生活は、自己の存在意識をおびやかしていると感じたのです。母親であることは、その意識をおびやかすものではなく、むしろ自己の意識を強めるものであって、この時期の私は、一人何役もこなしていたわけです。

子どもと仕事との葛藤

一九六〇年代は——いまもそうですが——お手伝いさんを見つけることは、とても困難でした。子どもをみてくれる人を見つけるのが困難であったばかりではなく、夫も私も貧乏でした。お金がなかったのです。家事を手伝ってくれる人を雇うだけの収入もありませんでしたので、私はフルタイムの主婦生活と、フルタイムの作家生活とを送っていたことになります。机に向かうのは、やはり夜になってからでした。



ところで、六〇年代は、仕事に対する女性の意識が、じょじょに変化していった時期でもあります。

私の母の世代は、特殊な専門職以外、女性が家の外で働くことは、一般に受け入れられておりませんでした。母は英語・英文学の教師をしておりましたが、結婚と同時に仕事はやめなければならなかったのです。そのことは、のちのちまで、いろいろな意味で残念におもっていたようです。

六〇年代になって、女性に対する期待は変わりましたが、女性の境遇は、さほど変わったわけではなく、仕事を持つことを期待されながら、家事手伝いは依然として確保できないという状態が続いていたのです。

そこで、イギリスでは、個人の生活の変化に合わせて、社会の変革も必要なのだという気運が高まってきた、子どもの世話をするグループ、子どもを遊

ばせるグループなどが、組織されるようになりました。全国組織として、「家庭に縛られた主婦の集い」というグループができましたが、これは、知的関心や交流の欠如によって、もんもんと暮らしている女性たちが、近所どうしで集まって、読書会とか、勉強会、グループ活動などを行い、子守りの責任も分かち合うというものでした。

当時、私は、ストラットフォード・オン・エイヴオンに住んでおりましたが、劇場関係者の保育グループを、私自身、組織いたしました。このグループは、うれしいことに、今も存続していますが、私がさいしょに組織した一人だということは、誰も覚えていないようです。

ところで、女性の自立と自助活動を推進する運動と並行して、一方では社会における女性の役割の変化にもなって、女性はより多くのストレスを感じさせられ、より強い罪の意識を持たされるはめになったのです。

私がいまでも愛読している新聞の『ザ・ガーディアン』は、女性の自立運動の先駆者でしたが、毎週木曜日に、「女性の頁」というのを設けて、その時その時の女性にとって重要ないろいろな問題を取り上げました。その頁で何年にもわたって議論された一つの問題は、主婦とキャリア・ウーマンとの問題でしたが、ジョン・ボールビーというお医者さんの育児論についての激論が繰り返されたものです。ボールビー先生は、子どもが母親から引き離されることによって受ける害を論じた重要な書物を何冊も書いておられますが、中でも母と子の絆きずなを論じた『愛情・隔離・損

失』という問題の本は、わずか一時間、子どもを置いて買い物に出かけるだけでも、深い罪の意識と、責任を放棄しているという不安を母親に感じさせたものなのです。

この時期には、前衛的な女性の間で激しい論争がくりひろげられました。私自身、母親は家において子どもの世話をするべきであるという考えと、女性もキャリアを持つ権利があるという考えとの間で揺れ動いておりました。すでに三人の子どもの母親であった私は、この二つの欲求の相克の間で悩みました。

私の第三作『碾き臼』は、三人目の子どもがお腹にいる時に書いたもので、子どもが生まれて間もなく出版されたのですが、ポールビー先生の説をとり上げました。母親と子どもが引き離される苦しみ、この場合は、子どもの入院によってですが、その苦しみを描きました。私は分水嶺の両側に立っていたようなもので、一方では母と子は、固く結ばれた一つの単位ユニットであって、なものによっても引き離されてはならないと信じながら、もう一方では、自分の仕事をする時間を渴望していたのです。

実際には、短時間手伝ってくれる若い女性を代わる代わる頼んで、なんとか切り抜けたのですが、午後に子どもを散歩に連れ出してきて、私に二時間か三時間の自由時間を与えてくれる人たちで、家事手伝いとしては、それが限度でした。

そのうち、子どもが学校にあがってからは、自然、私の自由時間も増えましたけれども、子ど

もたちを学校へ迎えに行くという仕事は残っていました。それから、子どもが病気をした時のこと。仕事は続けるのか。子どもの病気の間は中断するのか。どちらを優先するのか。これは終わることのない葛藤でした。

女性作家の仕事

またこの時期に、私は、大学時代には考えもしなかった「女性作家の伝統」ということを意識し始めました。学生時代には、たんなる作家ではない、女性、の作家、という観念は、ほとんど持ったことがありませんでしたが、ここに来て、タイプライターの前に座って、過去の女性作家のことを考えながら、彼女たちは、自分の生活をどのように処理していたのだろうかと思うようになったのです。

ヴァージニア・ウルフの『自分だけの部屋』を読んで、一九世紀の偉大な小説家たち——イギリスにはジェイン・オースティン、フアンイ・バーニイ、ジョージ・エリオット、ブロンテ姉妹といった女性作家の力強い伝統があるのですが、そういう人たちのことを考えたのです。そこで気がついたことは、この作家たちは、誰一人として、子どもを持っていなかったということ、したがって彼女たちには、私のような家事の問題はなかったのだ、ということでした。

子どもを持っていた作家として唯一のお手本は、一九世紀半ばのギヤスケル夫人でした。彼女

は大家族だったのです。たしか娘が五人だったと思います。息子も一人いたのですが、その子を失った時に、息子に代わるものとして、さいしょの小説を書いたのです。このお手本は、私にとって大きな慰めとなりましたし、創作のインスピレーションにもなりました。

この時期にはまた、女性の創造力の問題がさかんに論じられました。女性に創造力が欠けているのは、もともと女性は家にあって子どもをつくるもので、作品をつくるものではないからだ、というような主張が横行していたものです。私自身は、明らかにその両方を行いたかった——子どももつくりたいし、小説も書きたい。そしてその両方が私にとっては大事なものだかったです。ですから、ギヤスケル夫人の前例は、貴重なものでした。

さらにこの時期は、フェミニスト評論、フェミニスト作品が論じられるようになった時期でもあります。一九六八年、私はすでに三、四冊、いや五冊の小説を出版していましたが、この年にさいしょのフェミニスト評論の本が、アメリカの作家、メアリー・エルマンによって出版されました。『女性を考える』と題するこの本の中で、エルマンは女性作家が、過去においてどのように扱われてきたか、どのような困難とたたかってきたか、なぜ、たとえば、ジョージ・エリオットは、ペンネームに男性の名前を選んだのか、といったことをとり上げています。こういう問題は、いまでこそ、たいいていの人が聞き知っていることですが、この時期に初めて広く論じられるようになったのです。

その当時、私はモーレイ・カレッジという成人教育の学校で、週一日教えておりましたが、この学校は、かつてヴァージニア・ウルフも、短期間教えたことがあるので、私にはとくに興味があったわけです。一九六八年に、ここで「女性の小説」というコースを教えました。こういう題のコースとしては、さいしょのものだったと思います。正規の科目としては、どこの学校にもありませんでした。

受講生はほとんど女性でしたが、二人だけ男性がおりまして、一人は引退した元大使、もう一人は、生涯仕事をしたことのない紳士でした。その当時も、この人は奥さんが働いて家計を支えていたのです。

二人を除けば、全部女性で、中には私と同じような若い母親もおりましたが、モーレイ・カレッジはなかなか進んだ学校で、託児所が設けられていたのです。若い母親たちは、子どもを託児所に預けて、話し合いを持ったため、デイスカッションに参加するために、クラスに出てきました。

中間休暇の時は、子守りが見つからなければ、私も子どもを連れて学校に行き、彼らは机の下にうずくまってデイスカッションを聞いていました。ときたま、デイスカッションの内容が、子どもの耳にはちょっと具合が悪いこともありまして、そういう時には、大人の話をする間はあっちへ行っていられっしやい、と言って教室から追い出し、その話がすむとまた中に入れてあげるというようにしていたのです。

女性作家はどのようにして生まれるのか、その人たちの問題は何なのか、もちろん、女性の受講生、女性の読者の問題、そして、なぜ私たちはグループとして集まり、グループとしておたがいの問題を話し合いたいのか、といったことを私たちは論じ合いました。

「自分だけの部屋」

ところで、この段階で私は、「自分だけの部屋」なるものをついに確保いたしました。いつも家で仕事をしないでもすむようにしたのです。家で仕事をしていますと、電話はかかりますし、さまざまな邪魔が入って、自分の仕事をしていて良いのか、いつも思わされ、自分の仕事よりも家事を第一にしなければ悪いような気がしていたのです。

そこで、ブルームズベリーに部屋を借りました。まさにヴァージニア・ウルフ的な対策だったのですが、朝、子どもが学校へ出かけてしまうと、机と椅子とタイプライターだけを置いてある、その小さい部屋に行って、仕事を始めます。一日の終わりには、子どもを迎えに学校まで行き、それからは、まったく別の人間に変身するわけです。

仕事をするのには、じつにつごうの良い方策でしたが、もちろん、前に申しましたように、いつも問題はありました。子どもの病気とか、その他のことで中断されましたが、それでも、この方法によって、とにかく二つの生活をどうにかこなしていきました。

母のことも気にかかることの一つでした。母が訪ねて来た時は、いつも仕事はしていないような振りをしました。母は、私が小説を書いていることは、知っておりましたし、私の作品の価値をみとめてくれていましたけれども、それでも母の前では、何も仕事をしていないように振る舞い、原稿も母の目にとまらないようにして、どうしても仕事に行かなければならない時は、今日はB B Cに行くの、とか、インタビューに出るの、とか言っただけで家を出ました。そのほうが、なんとなく大事な仕事をしに行くように聞こえるかという感じがしたのです。タイプライターに向かって、小説を書きに行くの、というのは、どうしても言いにくかったです。それが私にとって、いちばん大事な仕事であるにもかかわらず、です。

この時期に私は、二つも三つものことを同時に行う能力を身につけたと思います。それは多くの女性が、必要やむなく身につけるものだと思いますが、女性は、一つのことに集中できる自由を与えられていなかったし、そのために必要な周囲の協力も得られなかったのです。私は、いまでは、一つのことに集中する自由があるにもかかわらず、同時に二冊の本を読んだり、二つのものを書いたり、いくつものことを並行して行っているのですが、こういうやり方の利点は、順応性ができること、必要な時には、さっと集中できるようになること、与えられた短い時間を有効に活用できることなどであって、それができるように訓練してくれた機会を貴重なものであったと、いま思っています。

作家として成功すると、駆け出しの時とはまた違った困難に出会います。家族の嫉妬、同僚の嫉妬など、さらにはマスコミの関心の的となること、創作の過程に付随する末梢的なさまざまなことが増加すること、インタビュアーや、講演旅行や、その他のことによって、創作の時間が削られることのないようにする苦勞などです。

けれども、もちろん、プラスの面として、作家が必要とする仲間ができること、必要な連帯感が持てるようになることなどがあります。

フェミニズム

この時期に、私は他の女性作家と接触を持ち始めました。ドリス・レスリング、アイリス・マードック、フェイ・ウェルドン、ベリル・ベインブリッジ、メアリー・ゴードン、アリソン・ユアリー等、英語で書いている作家ですが、イギリス人もアメリカ人もおりました。私と同じような問題を持ち、同じようなキャリアを持った人たちです。

私は、自分が独りぼっちでないこと、私の悩みは彼女たちの悩みでもあること、自分がいま到達した地点について話し合える人がいること、を感じるようになりましたが、その時点では、フェミニズムの議論が、時としてぜいたくな議論に思えるようになりました。いかにして生き残るか、という議論の中心から逸脱していると思われたのです。書評の中で、女性作家たちが、男性

作家と同じだけのスペースを与えられているかどうか、というような議論を女性たちが繰り返しているのを、興味を持って聞きましたし、マスコミが、彼女たちの容貌とか、髪形の形とか、洋服のスタイルなどに言及しているかどうか、といった議論も聞きましたが、そういったことは、私には重要に思えなくなりました——人生のもっとも重要な問題とは思えないのです。

フェミニスト出版の台頭や、女性解放運動の中の分離運動の台頭などを、私は興味深く眺めて来ましたが、わたくし流のフェミニズム、女性の独立へのたたかいは、一部の若いフェミニストたちには、すでに時代遅れと映るようです。

私の娘——たしか二六歳だと思いますが——ラッガー出版社という、女性の手によって運営されている、有名な出版社につとめているのですが、世の中のことで、彼女には不愉快に思われる事柄を私に言っけかせてくれることがあります。

先日、私の家に何人かの友達をお招きして、うちうちの夕食会をした時のことですが、お客様の中に、私どもの昔からの友人で、男性ですけど、思いやりのある、感受性の鋭い、とてもすてきな人がいました。が、彼が帰ったあとで、娘は私に「あの人、とっても男っぽい、大きな声を出すのね」と申しました。私自身はぜんぜん意識しなかったのですけれども、そう言われれば、たしかにその人は、多少、威圧的な口のきき方をします。

私は感じないことで、若い人たちは問題にすること、そういった事柄の、まったく新しい意識